

最優秀賞【小学校高学年（五・六年生）の部】

ぼくと龍の命の授業

（課題図書：さようなら、捨て犬・未来）【感想文】

筑西市立河間小学校 六年 柴 基

「捨て犬。」題名のこの言葉がぼくの心に引っかけた。ぼくが飼っている龍と同じだったからだ。表紙を開くと、捨て犬だった未来は子犬の時に目や足首を切られるという虐待を受け捨てられていたとあった。ぼくはそれを知って、

「どうしてそんなことができるの。」
と、ショックを受けた。でも、元気に砂浜を走ったり、龍と同じく大好きなボールで遊んだりしている姿もあって、ぼくはほっとした。

未来は、殺処分される直前で動物保護ボランティアに引き取られ、その後今西さんの家族となった。そして、今西さんと一緒に多くの学校や施設を訪れ「命の授業」を行ってきた。その授業は、未来を通して「命の無限の可能性」を考えてもらうという道德の授業だ。同時に、命を捨てるのも命を救い守るのも人間であることを伝え、人としての幸せも考えてもらう授業でもあるとのことだった。そんな活動をしてい

る今西さんと未来はすごいなぁと思った。

ぼくは、その中でも「命をあずかる責任」、助かった命を天国に行くその時まで幸せにするという話に、はっとさせられた。ぼくの家は龍はどのようなだろう。ぼくは龍の命をピカピカにできているのか、不安になったからだ。龍も家に来て十二年、最近は散歩する距離も短くなり、おやつをキャッチするのも失敗が増えた。龍も年をとったのだろう。だから、最期まで龍が元気にピカピカとぼくの家で過ごせるように、大好きなボール遊びをしたりゆっくり散歩したりと、龍と一緒にいる時間をこれからもっと増やしたいと思う。

また、人間は生まれつき「だれかを傷つける力」と「だれかを笑顔にする力」の二つを持っていて、どちらの力を使う自分が好きかと今西さんは言っていた。ぼくは、だれかを笑顔に幸せにできる力を持った自分でいたいと思った。それに、だれかを幸せにすればそれ以上の幸せを自分がもらえるとも言っていて、ぼくも本当にそうだなと共感した。例えば、散歩をすると龍もうれしそうだし、ぼくもいい気分転換になる。留守番している龍に「ただいま」となると、龍はしっぽをふってどんな時もおむかえてくれ、疲れも一しゅんにしてふき飛ぶ。

そんなふうに来ると龍を重ねていたら、ぼくと龍との出会いも命の授業の始まりになっていると思った。初めて龍が家に来た時、ぬいぐるみのようにもふもふした龍をだっこしたぼくは離さなかったという。きっとその時、龍がぼくのやさしさのスイッチをオンにしてくれたのだろう。この十二年間一緒に育ち、龍

から命の大切さやお互いを思いやる喜び、動物を育てる大変さなど色々な事を教わった。だからこれから
は龍に恩返しをしながら、年をとっていく龍とゆっくり過ごしていきたい。そして、龍に入れてもらった
優しさのスイッチで、全ての命を大切にし、自分の周りの人達から笑顔の輪を広げていける人になりたい。